
黒力士サーガ

Oshi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒力士サーガ

【Nコード】

N9203H

【作者名】

O s h i

【あらすじ】

昭和を舞台に起きる数々の怪事件、その背後には暗躍する力士達の姿があった！角界の黒い霧を撃つ、鬼気迫る戦慄のノン・ノンフィクション。一話完結型の連作集

闇に囁くもの(前書き)

本作はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

闇に囁くもの

「黒力士 其の一 闇に囁くもの」

薄暗い理事長室の中、付けたままのTVががりたてる。沖津風親方逮捕のテロップが画面を覆いつくすのを滝の湖は黙って眺め続けた。外に出れば報道陣に取り囲まれ質問攻めにあうのは目に見えている、今の状態で平静を保ったまま答えられるとは思えない。

整頓され無駄な物は一切無い執務机の上で、写真立てだけが微かなTVの光を反射していた。収められた写真の中では青年の日の自分と沖津風が笑っている。涙でぼやけるセピア色の写真は容易に過去へと意識を連れて行った。

滝の湖が相撲部屋の戸を叩いたのは高度経済成長期真っ只中である。田舎から上京したばかりの、でかい図体しか取柄のない少年には成功の道はそれしかなかった。そこで、故郷では悪ガキとして好き放題振舞っていた彼を待ち受けていたのは、かわいがりという名の先輩力士からの集団暴力だった。

当時の相撲人気は鰻上りで門下生も多く文句を言おうものなら放り出された時代だった。その事がしごきをより激化させていた。骨が折れても医者に診せることなど適わず痛みに耐えたまま黙って寝込むことしか出来なかった。やがて一人、二人と同門が去っていく中、滝の湖は地獄に耐え続けた。殺人すら黙認される地獄だとしても何も持たない貧農の倅に他に行く場所など無かったからだ。

そうして数年が過ぎ部屋での地位も確立し地方巡業に出られるようになった頃、彼は沖津風に出会った。

終戦直後からの復興と共に表には出ない暴力の戦後史が始まった。闇市を舞台に、不逞外国人共と復員兵を中心に組織された暴力団の

間で血で血を洗う抗争が繰り返されたのである。

そこでヤクザ達は相撲取りに目を付けた。国技であることから早々に相撲協会が再開されており、血気盛んな若者達が集まっていた集団は格好の暴力装置だったのだ。暴力団と各相撲部屋は手を組み、巡業の資金援助と引き換えに抗争があると力士を貸し出す協定が闇の奥深くで結ばれた。時を経るにつれその繋がりはますます深まり両者の境界は曖昧になっていった。

やがて一般人相手の露出が増えてきた頃、相撲協会は自身の暗部の隠蔽を画策し組織を二つのセクションに分けた。表舞台に出る通常の力士と汚れ仕事を担う黒力士に。

初めて会った時の沖津風は黒力士として東北の地元有力者の元に派遣され、新興の組を潰している最中だった。近くでの興行に出場していた滝の湖はその補助として警察方面への対応といった裏方的な処理を手伝うよう親方に言われていた。事務能力に長けていることを見越されての登用だろう。彼は相撲の腕よりも部屋運営の手腕を買われていた。しばらく二人で共に行動したが滝の湖にとっては、驚かされることの連続だった。沖津風は体格こそ力士の中でも小さい部類だったが、恐ろしいまでの腕力を授かっていた。湯にでも浸かるように気楽に出かけたかと思うと敵方のチンピラを十数人まとめて叩きのめし息も乱さず帰って来たものだ。

また、この男は笑うとひどく人懐こい笑顔を浮かべた。その生き様に滝の湖は魅せられた。

次に会った時は学生運動の渦中だった。日米安保問題で世間が揺れており公安が表立って動けない状況にあった。そこで非公式な形で相撲協会に打診があったのだ。グレーに位置する黒力士は国家にとっても動かし易いコマだったのだろう。

幾つかに細分化した過激派の実態は公安も掴みきれておらず一つ一つを滝の湖が探り出し沖津風率いる黒力士達が壊滅させていった。学園祭気分が抜けない餓鬼共の尻拭いを、まともな教育を受けられ

なかつた自分達がさせられるとは皮肉な物だと自嘲気味に笑いあつた。

この期に二人は親交を深めた。安酒屋で沖津風が身の上話を聞かせてきたことには彼もまた困窮農家の倅だった。村相撲の際に威張り腐つた地主の息子を投げ飛ばしたのを契機に相撲の暴力性に魅了されたのだと言う。スポットライトが当たる場所で活躍することは出来ないがいつか自分の部屋を持ちたいと語る彼の目はまるで子供のように輝いていた。

その後もプロレス団体との抗争の際など何度も共に働き友情を深めていった。気付けば、いつしか互いに組織の中枢を担うようになり、その意思決定にも参加するようになっていた。昔見た夢が叶うのも時間の問題だった。

だが時代は変わり輝かしい日々は過ぎた。

力士志願者が急減し角界も大半を外国人力士に頼らざるを得なくなってきた。生き残る為には伝統芸能としての色彩を強めていくしかない。過去の繋がりから表沙汰にはしないものの、公安からヤクザ稼業から手を引くよう警告を受けていた。必然的に黒力士も解散しなければならぬ。だが沖津風は最後まで相撲の持つ暴力性を捨て去ろうとはしなかつた。彼は厄介払いとばかりに部屋を与えられ協会から孤立した。最後に、理事長として表舞台に立つようになっていた滝の湖が説得にあつたが、意見は平行線を辿り二度と道が交わることはないと感じさせた。

外部への繋がりを遮断した沖津風部屋は先鋭化していった。それは、そこだけが時代の流れと闘っているようだった。結果、純化した思想は暴走を始め多くの死傷者が出てしまった。最早部屋の存続も危ういだらう。

沖津風は誰よりも相撲を愛していただけだった。そのことを一番に知っているからこそ、滝の湖は悲しくて仕方なかつた。

何かを間違えたのは分かるが何を間違えたのかが分からない。た

だ相撲がとりたかったただけなのに、社会という土俵は広すぎて上手く立ち会ったつもりでも黒星ばかりが付いてしまった。

写真立てを倒すと涙を拭い席を立つ。だが、まだ自分の立会いは終わっていない。熱い思いが滝の湖を突き動かしていた。どんな時も沖津風は試合を投げたりしなかった、ならば、自分だけ土俵を降りるわけにはいかない。

外に出るドアに手をかける、一瞬逡巡する思いに足が止まる。ふと背中を押す手を感じた。自然と笑みが零れる。そのまま勢いよく扉を開いた。

「完」

闇に囁くもの(後書き)

実は壮大な「黒力士ワールド」の構想が…

春来る鬼(前書き)

連作なんですよ。どれから読んでも変わらないんですけど。

春来る鬼

「春来る鬼」

「本当に凄いネタがあるんだよ」

黒電話のコードをこねくりながら男が熱っぽく言う。冬が去って間もないというのに着ているシャツが汗ばむ。

「この話が載りさえすれば今年の新聞協会賞は間違いなく俺のもんだぜ」

男は文筆で生計を立てている者である。

受話器の聞き取り口からは胡乱げな応対が返って来た。

「一つだけ言っておこう、伝統芸能が無くなりかねないネタだ」
向こう側で身を乗り出す気配がする

「近年麻薬の流通量が急増しているだろ。その出所ってところかな」
相手側から面会が口早に申し出される

どんどん

その時、玄関口からノック音がした。

「じゃあ後で、都合の良い日が決まればこちらから連絡するよ」

有無を言わず受話器を置くと男は訪問客の応対に出た。

相手が誰か確かめようと引き戸に手をかけたところで声がした。

「出稽古でこわす」

衝撃と共に戸板が吹っ飛んだ。その直撃を食らい男はもんどりうつて倒れ付す。ふらつく頭を抑えながら闖入者を見ようとした時、そいつは男の胸倉を掴み持ち上げた。言葉にならない命乞いは無視され、そのまま男はなんともなんとも壁に叩きつけられる。途絶えようとする意識の中で男が最後に見た姿、それは紛うことなく鬼だった。

最も古い相撲の記述は古事記に見出され、その起源は神事に端を

発するとされている。開始の掛け声「はっけよい」が「八卦良い」に係る様に、宗教的な性格を持つことは明らかである。神代にまで遡るその正確な始まりを知ることが不可能に近い。

しかしながら、とある東北の寒村では以下の変わった言い伝えが残されている。

『はるになるとおにさんやまからおりてくる たんぼさはいつてあらしまわるんだ むらのひとたちいつもこまってたつて したらむらいちばんのちからもちきんたうごいたんだ けいだいでなんにちもくみあつたと ついにちからまけたおにさんえいやつとなげとばされたんだ まいつたおにさんどつかににげだしてもうこなかつたとさ きんたまますつよくなつてみんなのやくにたつたんだつてよ』

時代は変わり表現は異なつていても今にまで同じ内容が語りつがれている。この民話を再現するように毎年春になると村の中心に位置する神社の境内で相撲大会が催される。

著者不明「相撲に関する覚書」より

彼はこの村で生まれた。名前などどうでもいい。

片手では数え切れない兄弟達に囲まれ育つた彼は、その中でもとりわけ愚鈍と思われていた。何をやらせてもどん尻にしかない彼を家族は邪険に扱い、また彼も何も感じなかった。ただ一つ彼が天から与えられたのは驚くべき怪力だった。親は彼を牛馬の如くに扱き使った。来る日も来る日も。

成人に達した年、彼は請われて村相撲に参加することになった。順調に勝ち上がっていき、決勝の相手は村一番の地主の息子に決まった。何のことは無い出来試合だったのだ。試合前、村の顔役に何度も相手を勝たせる際の段取りを説明された。土俵に入ると地主の息子が勝ち誇つたように見下す顔つきをしている。

「はっけよい」

何かが自分に入ってきた気がした。

「のこった」

それは解き放たれた。気が付くと肉塊と化した相手が目の前に転がっている。会場がざわめきに包まれる中、彼は駆け出し会場から逃げさった。

急いで家に戻ると、何事かと尋ねてくる両親を突き飛ばし金銭だけを持ち出す。そのまま駅まで走りぬけ動き出した汽車に飛び乗った。東京に向かう汽車の中で彼は完全に理解した。よく聞かされた昔話で、投げ飛ばされた鬼は何処に消えたのかいつも考えていた。「すもう」とは「すまう」を語源とする言葉、きつと「住まい」始めたのだ、投げ飛ばした相撲取りの中に。胸の奥で脈を打ち始めた鬼を感じながら彼は笑っていた。

事件現場に足を踏み入れた老警部は酸鼻に顔をしかめた。壁のそこかしこにこびり付いた血が行われた暴行の壮絶さを物語っている。ベテランとされる今までを殺人事件担当として過ごした彼にとってもこれは常軌を逸していた。

被害者は三流雑誌を中心に投稿することで生計を立てているフリーライターだった。最後に連絡を受けたという編集者によると何か大きなヤマを追っていたことは分かっている。だが…

何度見ても信じられない。原型を留めない程に破壊された死体。それは到底人間の犯行とは思えなかった。捜査員同士で交わされる会話の間から「鬼」という単語が聞こえてくる。

そう、鬼だ

老警部は吐き気を覚えた。

彼はこれを見たことがある

まだ経験が浅い新任刑事だった頃に彼はある事件に駆り出された。下山事件、それは後に昭和三大事件の一つとされるようになる殺人事件だった。

事件の概要は、国鉄総裁だった下山定則が出勤途中に失踪、翌日未明に死体となって発見されたというものであり、今もって真相は明

らかにされていない。

その際に見た下山総裁の遺体は、轢死と発表された死因とは明らかに異なる様子を見せていた。彼は聞き込みの際に得た大柄な男達の情報を持って上司に掛け合ったが、それ以上の追求は許可されなかった。とてつもなく巨大な霧が包み込んでいたのだ。

今また彼は同じ異様さを感じとっていた。気分転換に屋外にでる。煙草を吸うと勢いよく煙を吐き出した。紫煙が立ち上り青空を滲ませていく。全ては黒い霧の中だ。止めてあるパトカーの中で付きっぱなしになっていたラジオが緊張を孕んだ声でニュースを読み上げた。学園紛争が激化してきている。

季節は春。多くの闇を隠したまま昭和は未だ終わる気配を見せなかった。

「完」

春来る鬼(後書き)

シエアード・ワールド的に広がればいいのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9203h/>

黒力士サーガ

2010年10月8日23時37分発行